

「非核非戦」の碑について

ここには、一万体とも二万體とも推定されるお骨が収納されています。このおびただしい数のお骨は、昭和20年(1945年)8月9日、米軍が投下した原子爆弾の直撃を受けて亡くなった身元の分からない方々の遺骨です。

被爆した長崎の爆心地周辺は焼きつくされ、爆風に吹き飛ばされた瓦礫に混じって、悪臭鼻をつく屍が、道路の脇や川底などに夏日に晒されて累々と横たわっていました。

家族を捜し回っている人々の町に進駐してきた米軍は、爆心地そばの浦上川沿いに飛行場を造る計画を立てます。

こうした惨状を憂えた人たちが、とにかく爆心地付近の死人を何とかしようと、拾い始めました。やがて、西坂にあった教務所(当時は「東本願寺長崎説教所」と呼んでいた)の婦人会は、昭和21年(1946年)3月6日、教務所長の呼びかけに集まり、市郊外の門徒同志にも応援をたのんで人数が増えていきます。

作業は長崎駅あたりから始まって大橋・住吉方面へ向かいます。水を求めて川の中に打ち重なったままの死体、あるいは半分は腐って半分は白骨になった者など途方もない数です。廃材を集めてはできる限りは茶毘に付す。食べ物に窮して痩せた体で荷車を牽き、そして急きょ仮設した教務所に集めるという毎日の作業でした。そのうち復員してきた僧侶も加わります。現在平和記念像が建っている丘にあった長崎刑務所では、窓に向かって寄りかかったまま息絶えた白骨の群を見ました。そして作業が終わるころには秋風が吹いていたそうです。

市の収容施設に引き取ってもらうことをはかりましたが、そこも膨大な遺骨の山があり手つかずの状態でした。その後も噂を聞いた人々によって持ち込まれた遺骨も加わってさらに量は増えます。置き場に困って収容先を捜し回りましたが雨露をしのげるようなところはなく、困り果てた末に一時は大浦の妙行寺の本堂に預かってもらいました。ところがそこも被害を受けていたため雨漏りがひどく床が抜けたりでどうにもなりません。結局教務所に仮安置の場所を設け、二十六個の木箱に納めて責任をもってお預かりすることになったわけです。

一体この、出身地も名前も不明な人々はどういう人々なのか、今も知ることができません。

私たち真宗大谷派長崎教区は、この物言わぬ人々の前でなすすべもなく、とにかく毎月九日には法要を勤め営んできました。そして十年ごとには県内外有縁の人々が集まっての法要も勤めてきました。また、五十年間の歩みの中で、一体これらをどのように処遇すべきかと、色んな議論も重ねて来たのですが、なかなか結論が見つからないまま、長い歳月を経てしまいました。

しかし、この半世紀の時代を費やして、私たちが識ることになった一大事があります。

それは、ついに原子爆弾という核兵器までも作り出してしまった人間の知恵の愚かさです。そして、その知恵の無明の闇が生み出す罪の深さです。

死者たちはこの人間の愚かさを、哀れみ、悲しんでくださっています。その悲しみの声は実際の耳には聞こえません。しかし心の耳を澄ます時、戦争にたおれた方々が「非核非戦」と叫んでおられます。

碑の建設に意を決した私たちは、『非核非戦』を碑文の銘としました。そしてさらにその声は、「“我だけ”が地上の主人公になるのではなく、あらゆる命と“共に生きよ”」と願ってくださっています。

ここに永い歳月をかけて私どもが聞き取った死者から出ずる慈悲の声を石に刻んで、真の平和を希求する人間の世に公開いたします。

「非核非戦—共に生きよ—」パンフレット(旧長崎教区作成)より抜粋

(※この文章は、資料が乏しかったため、当時を知る方々の聞き取り調査を基に、旧長崎教区が作成したものです。)